

97

けほん踊

Campus[®]
SKETCH BOOK

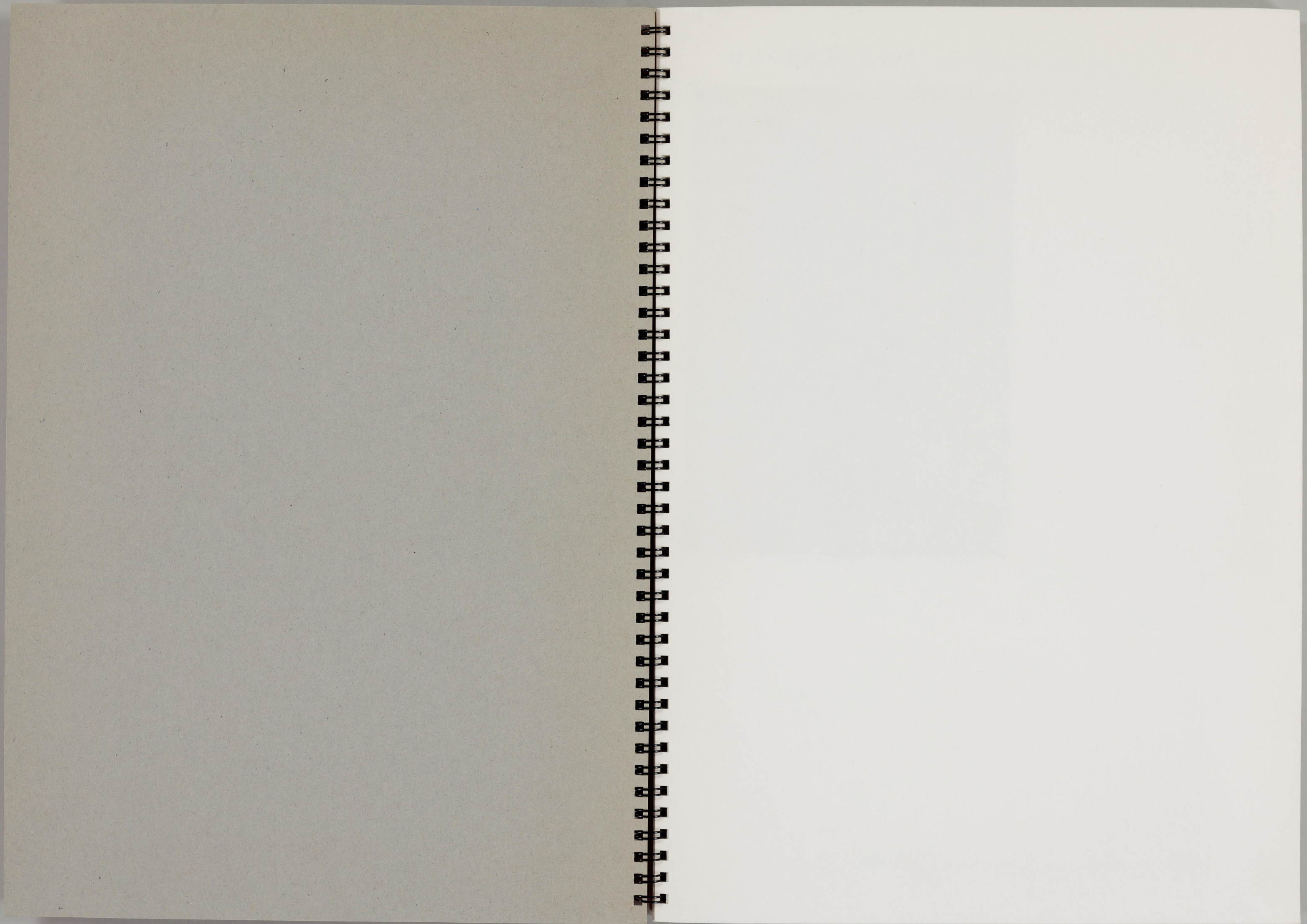
KOKUYO
E-T100



6 7 8 9 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4

小山豊旧蔵資料(御坊市教育委員会蔵) 97

001



けほん踊は戲遊瓢踊又は奇瓢踊とも書く。

この踊りは念仏踊の一種で、御坊市小竹八幡神社の秋祭に奉納され、古くから御坊組の五十才以上の男子の氏子によって伝承されて来た。絵模様様の白麻の平袖の上にガンマンという黒い

昭和三十年には和歌山県指定無形文化財第一号に指定されたのに続いて、昭和五十一年には和歌山県無形民俗文化財に指定され、また昭和四十九年には国の選択芸能の指定を受けた。和歌山県民俗芸能大会和歌山大会、御坊大会、新宮大会、万国博覧会お祭広場、近畿東海北陸ブロック民俗芸能大会などにも公開出演している。



けほん装束等 S. 45年

戯瓢踊 (けほんおどり)

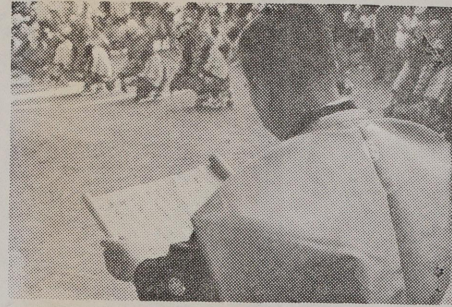
けほん踊は戯遊瓢踊又は奇瓢踊とも書く。

この踊りは念仏踊の一種で、御坊市小竹八幡神社の秋祭に奉納され、古くから御坊組の五十才以上の男子の氏子によって伝承されて来た。

絵模様様の白麻の平袖の上にガンマンという黒い袈裟のようなものを着、頭には花笠をいただく古風ながらカラフルな衣装をつけた踊手が、大瓢を先頭に太鼓、鼓、鉦を打ち鳴らす列と、小瓢を肩にする列が、「次郎も太郎も出でられ候え」の口上からはじまり、踊唄を歌いながら、あるいは陣をつくり、あるときは対面し、又入れ替わりなどして古来の風流さながら華麗に踊られる。

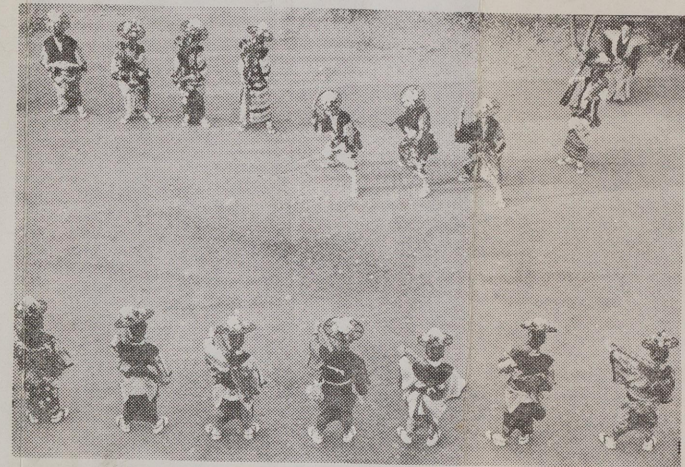
いづれから御坊祭に奉納されるようになって来たかはつまびらかでないが、歌詞や節廻しなどから室町時代末期にはじまったと考えられ、神仏習合の遺風を伝えたものとして高く評価されている。

またこの踊りは、「紀伊名所図絵」にも紀州藩祖徳川頼宣公がご覧になって感賞されたと誌され、九代藩主徳川治貞公も激賞されて踊唄にある「四恩」の意味を郷民にさとした「四恩状」を賜わり、以来「御書」とあがめて踊りの前に奉読するのがならわしとなって今日に及んでいる。



昔は御坊組によって保持されて来たが、現在は広く氏子の有志による戯瓢踊保存会によって保持、継承され、しきたりを守って小竹八幡神社の秋祭の宵宮十月四日には日高別院で、本祭の十月五日には小竹八幡神社で奉納されている。

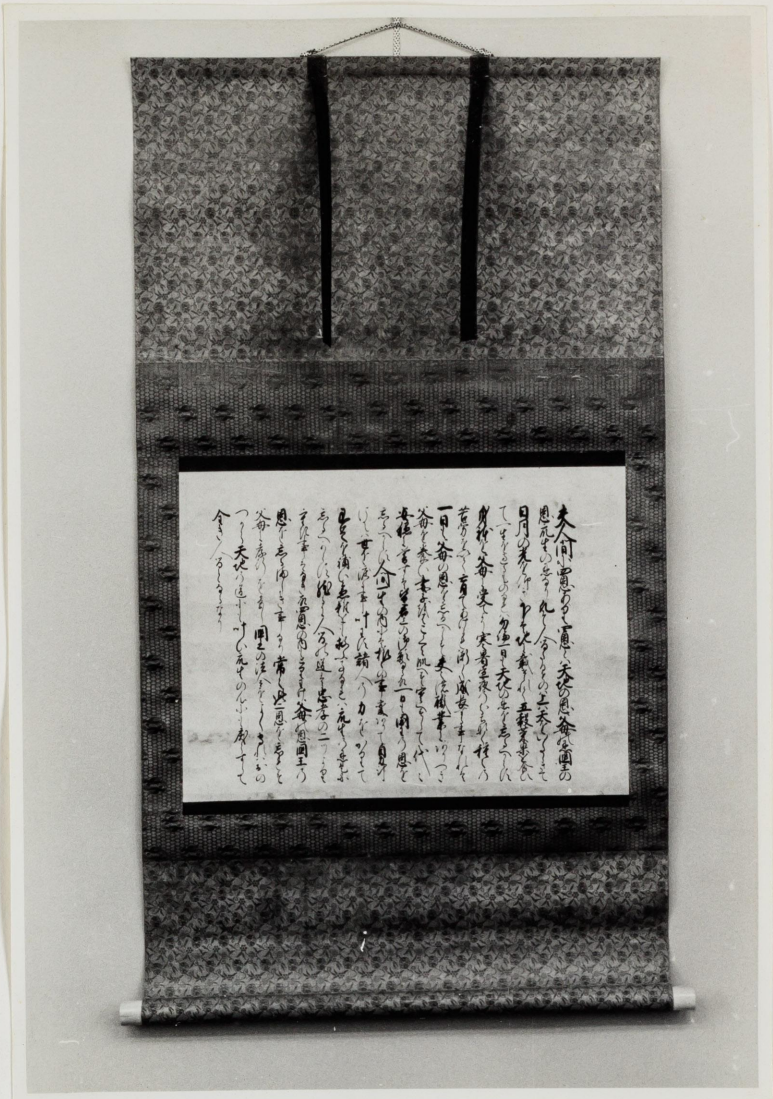
昭和三十年に和歌山県指定無形文化財第一号に指定されたのに続いて、昭和五十一年には和歌山県無形民俗文化財に指定され、また昭和四十九年には国の選択芸能の指定を受けた。和歌山県民俗芸能大会和歌山大会、御坊大会、新宮大会、万国博覧会お祭広場、近畿東海北陸ブロック民俗芸能大会などにも公開出演している。



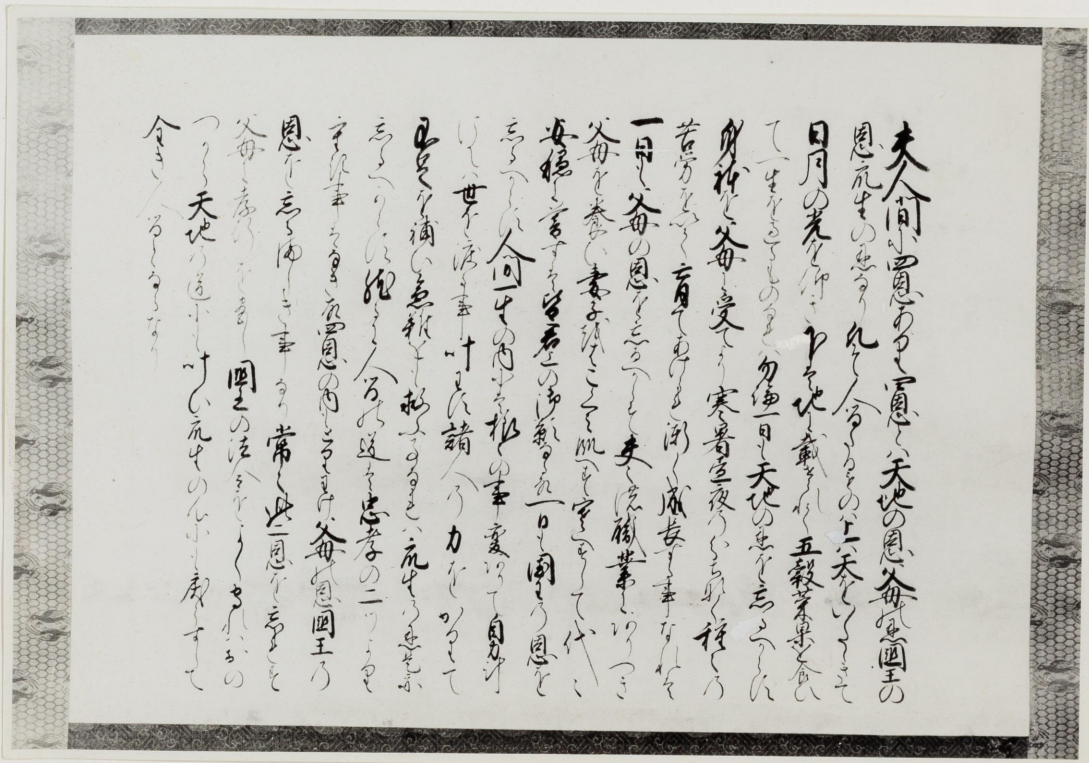
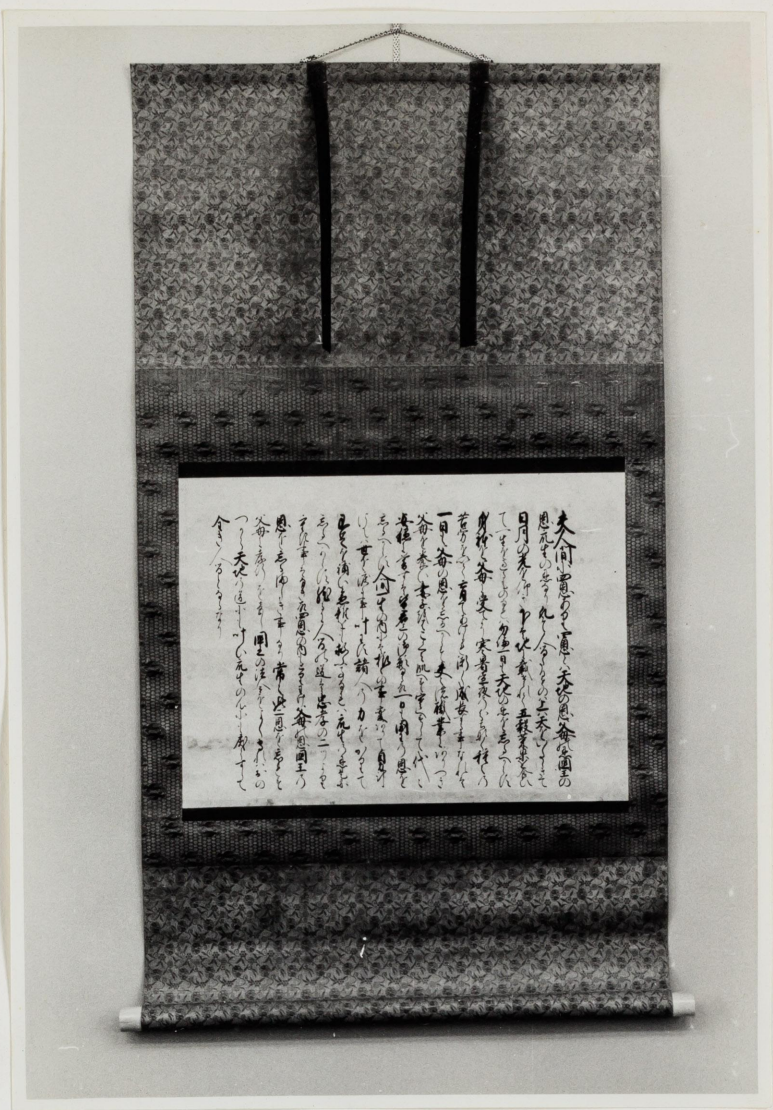
戯瓢踊 (けほんおどり)

次郎も太郎も出でられ候え。
心得申して候。
夏と秋、夏と秋。
お茶事もはやるなりや。茶せん召され候や。お茶せん召され候え。よき光りぞとかげたのむ。世の光りぞと。
たのき他の教も仏の教、御寺尋ねて戯遊瓢、ム、ハ、極楽の前に、流るる阿弥陀川、い
一日も国王の恩を忘るべからず人間一生の内には様々の事変ありて自力計りにては世を渡
る事叶はず諸人の力をかりて不足を補ひ急難をも救ふ事なれば衆生の恩是亦忘るべからず
然るに人間の道は忠孝の二つより重き事はなき故四恩の内も取分父母の恩国王の恩を忘る
まじき事なり常に此二恩を忘れず父母に孝行を尽し国王の法令をよく守ればおのづから天
地の道にも叶ひ衆生の心に悖らずして全き人間となるなり

無第一号
指定書
名称 戯瓢踊
頁数 一件
和歌山県文化財保護条例昭和二十一年和歌山県条例第四十号により和歌山県指定文化財に指定する
昭和二十一年四月一日
和歌山県教育委員会



夫人間恩のついで天の恩父母恩国王の恩此の恩を忘るべからず人間一生の内には様々の事変ありて自力計りにては世を渡る事叶はず諸人の力をかりて不足を補ひ急難をも救ふ事なれば衆生の恩是亦忘るべからず然るに人間の道は忠孝の二つより重き事はなき故四恩の内も取分父母の恩国王の恩を忘るまじき事なり常に此二恩を忘れず父母に孝行を尽し国王の法令をよく守ればおのづから天地の道にも叶ひ衆生の心に悖らずして全き人間となるなり



戯瓢踊 (けほんおどり)

「次郎も太郎も出でられ候え。」

「心得申して候。」

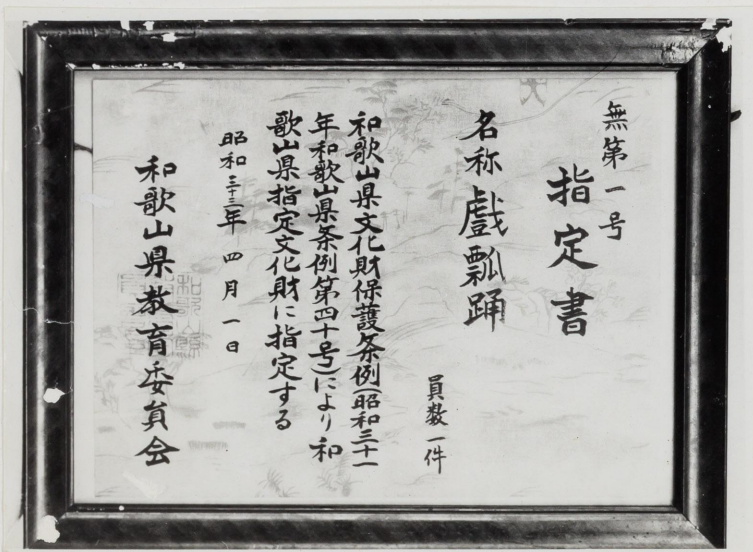
「夏と秋、夏と秋。」

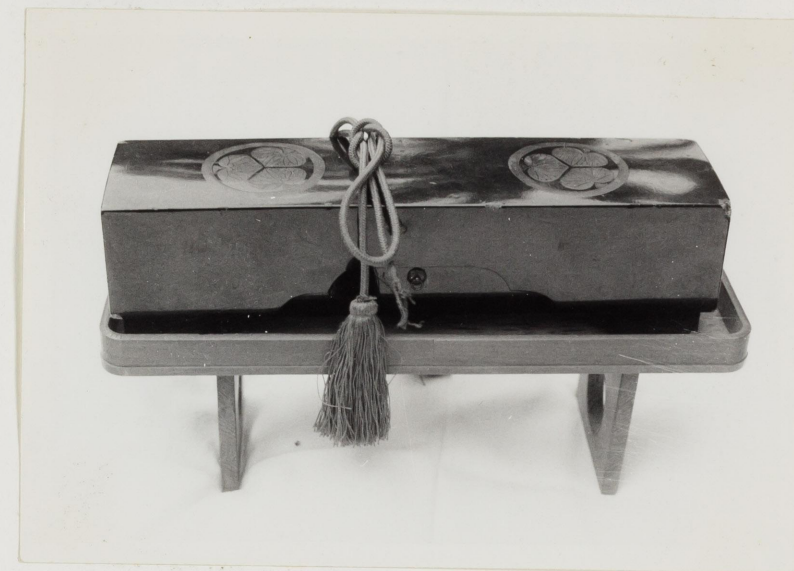
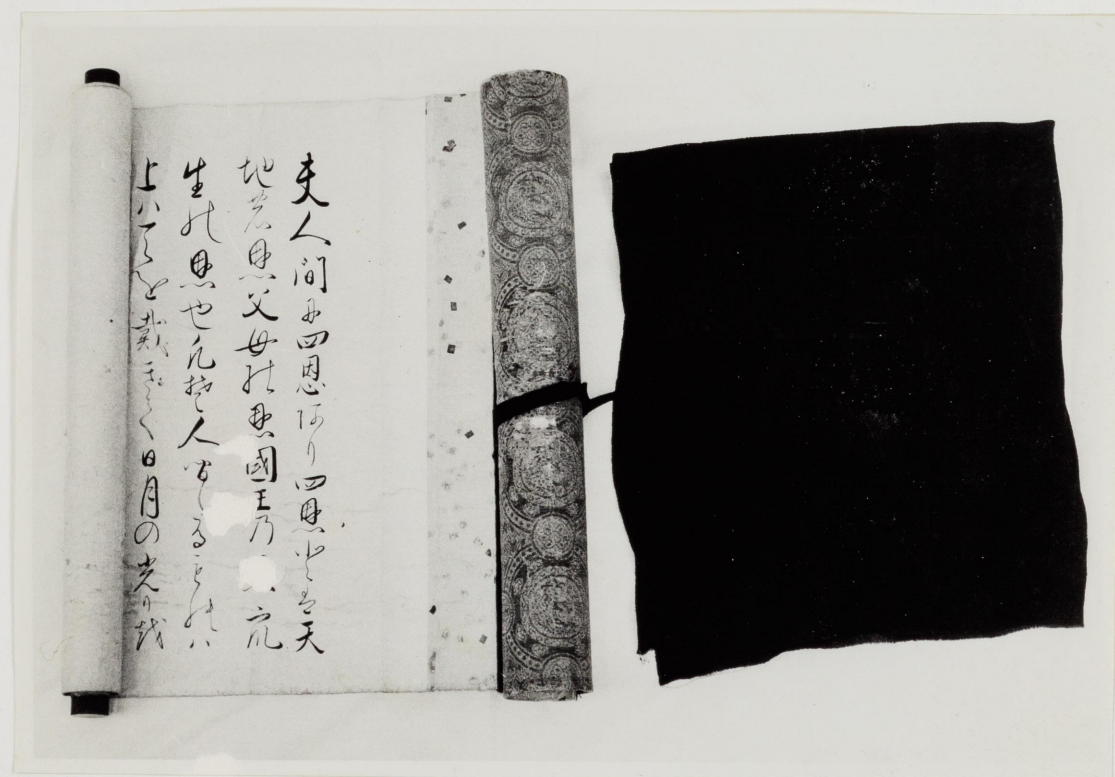
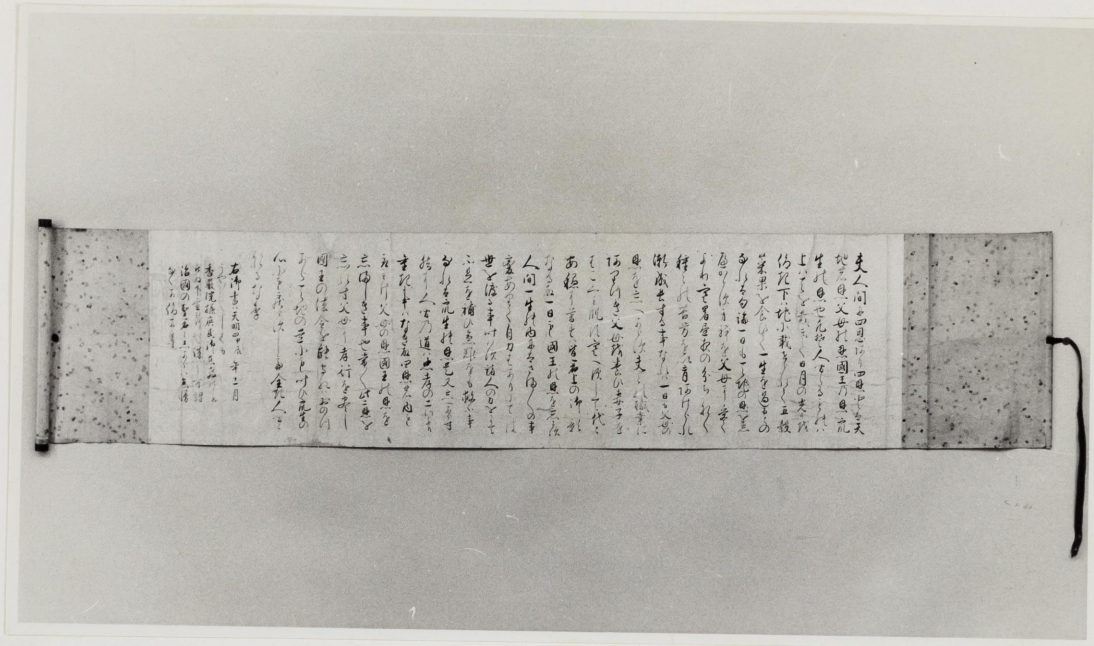
「お茶事もはやるなりや。茶せん召され候や。お茶せん召され候え。よき光りぞとかけたのむ。世の光りぞと。」

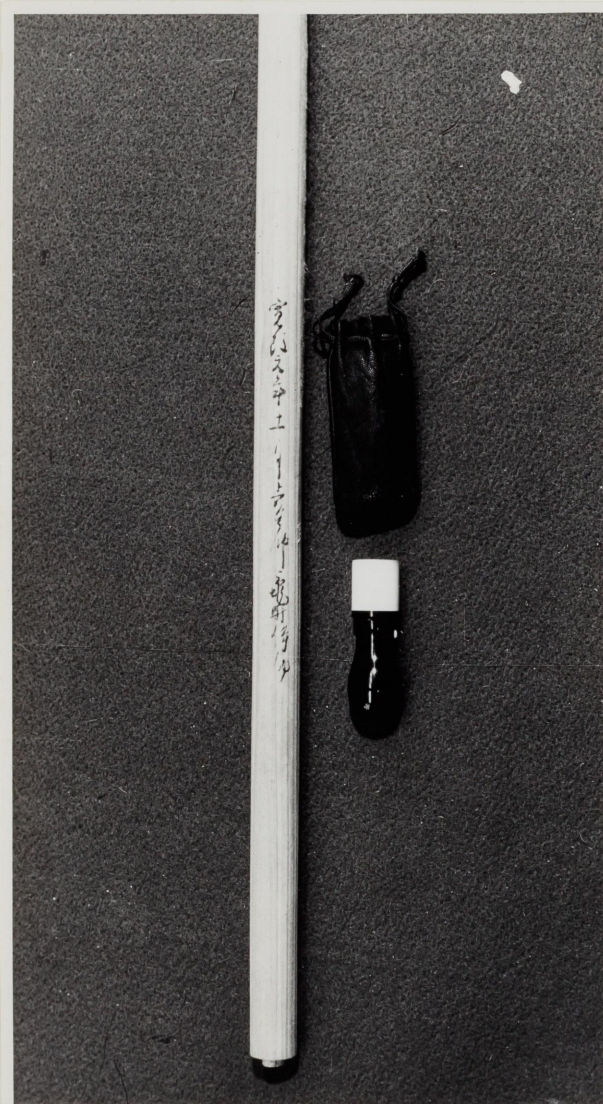
「たのき他の教も仏の教、御寺尋ねて戯遊瓢、ム、極楽の前に、流るる阿弥陀川、いかなる淵の、ヤホン、瀬になるらん。世に四恩あり、天地の恩、父母の恩、国王の恩、衆生の恩、この恩、四恩、一、二恩、一、何れか、おろかは、あらねども、父母の恩ニヒにひひの踊りをおんごろよ。ヒヤギー、ヒヤギー、ヒヤギー、ヒヤギンギノギ、ハハアア、しくはなし、父母が此の身を生ぜずば、超世の悲願に遇ひがたや。シヤノ、釈尊、みのりを、説かれては、鍾無常をのがるべき。ム、ム、ム、よしや君ただ、アハハ、上人の教へには、願もいらぬ、ソコジャ、行もいらぬ、ソコジャ、マツソコジャ、マツソコ、マツソコ、マツソコジャイ。寝ても、覚めても、忘るなよ、只一念な、念仏なりけり。融通念仏、南無阿弥陀、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、融通念仏、南無阿弥陀、思へば浮世は夢の世。ヒヤ、夢の間の、浮世に、何とくすんだりとしよ。瓢箪から駒が出まいものを、只兎にも角にも、月の夜すがら、いざ踊ろ、奢侈栄華は是れ皆、春の花、名利の心を止めて、急いで浄土を願ふべし。南無不可、波羅蜜薩波若多。」

四 恩 状

夫人間に四恩あり四恩とは天地の恩父母の恩国王の恩衆生の恩なり凡そ人間たる者は上は天をいただきて日月の光りを仰ぎ下は地に載せられて五穀菜果を食ひて一生を過る者なれば勿論一日も天地の恩を忘るべからず身体を父母に受てより寒暑昼夜の分ちなく種々の苦勞を以て育てあげられ漸く成長する事なれば一日も父母の恩を忘るべからず夫々の職業にありつき父母を養ひ妻子をはこみ飢寒へずして代々安穩に暮すは皆君上の御影なる故一日も国王の恩を忘るべからず人間一生の内には様々の事ありて自力計りにては世を渡る事叶はず諸人の力をかりて不足を補ひ急難をも救ふ事なれば衆生の恩是亦忘るべからず然るに人間の道は忠孝の二つより重き事はなき故四恩の内も取分父母の恩国王の恩を忘るまじき事なり常に此二恩を忘れず父母に孝行を尽し国王の法令をよく守ればおのづから天地の道にも叶ひ衆生の心に悖らずして全き人間となるなり







父人間也四恩有り四母也天
地之母父母は其國王の母元
生れ母也兄弟人をももて
上とて親しく日月の光陰
何れ下れ地も載るも五穀
草木を食ひて一生を過すの
少くも分満一日も一休母を
思ひ候ふ所を父母一寧く
すれども母を思ふの心は
種々様々ありて言はれん
漸成せる事なり一日父を
思ふ三三三父は職業に
何れにても父は其の事を
とて之れを思ふ候て代
安んずる言も言ふ所の御
なり一日も國王の母を思ふ

人間一生の内母を思ふの事
家ありて自力を以ては
世に渡りては思ふの事
不忠を補ひて思ふの事
父を思ふ生れ母は又思ふ
結する事乃思ふの事
重んずる事乃思ふの事
父を思ふの母國を思ふ
三思も事也思ふは三思
三思は父也一思は母也
國主の法令を能くおの
りて思ふの事思ふの事
心も思ふ候て思ふの事
思ふの事

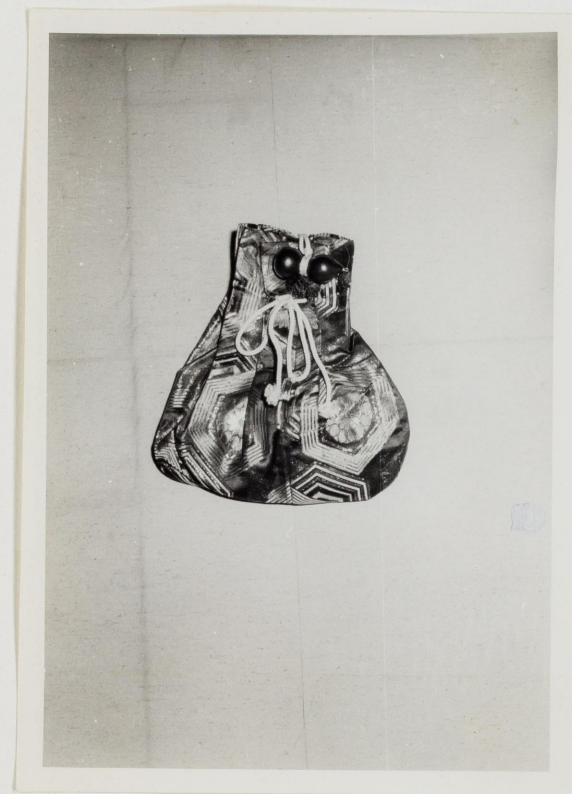
有希書天明四年二月

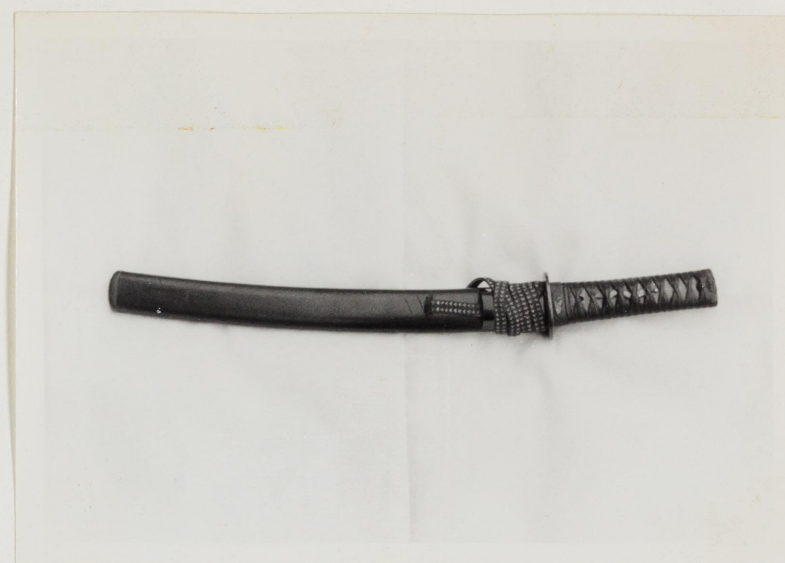
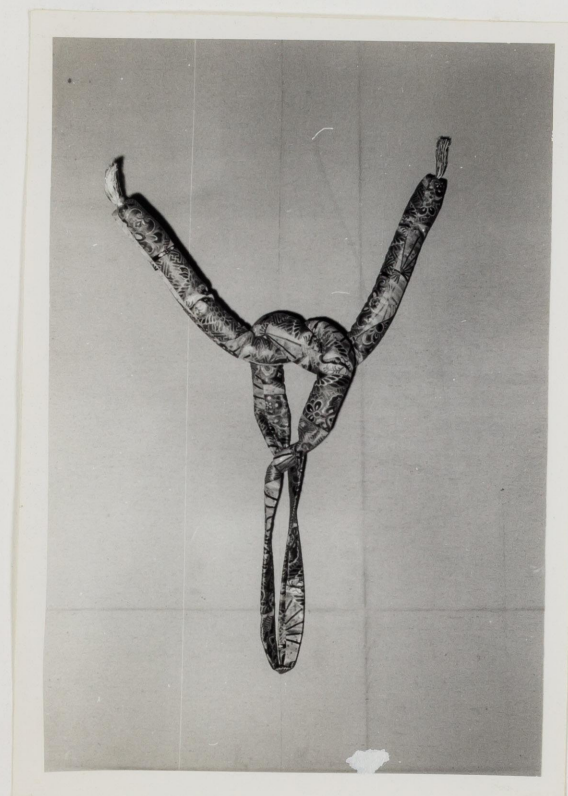
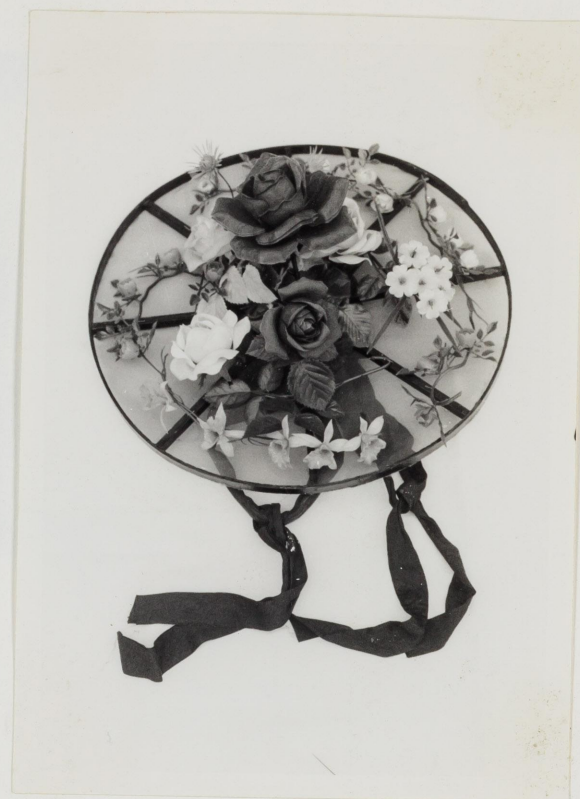
香嚴院撰
治國の要書とて思ふの事
思ふの事

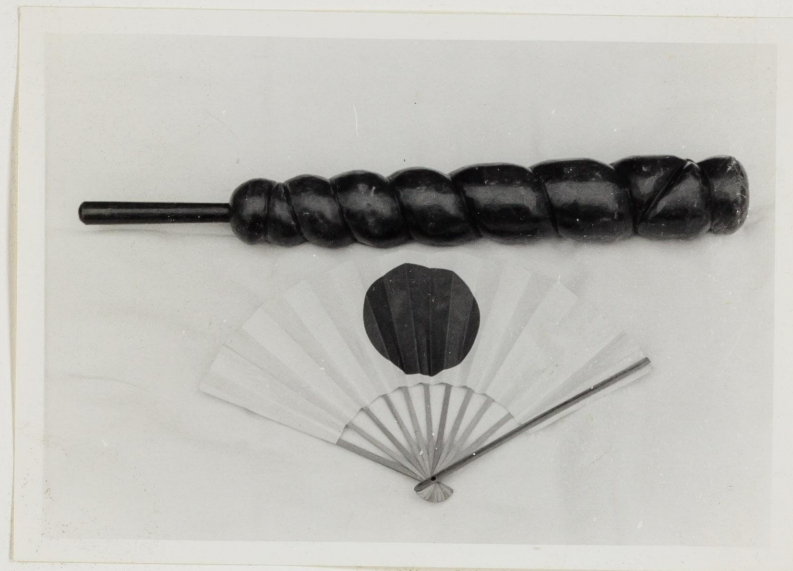
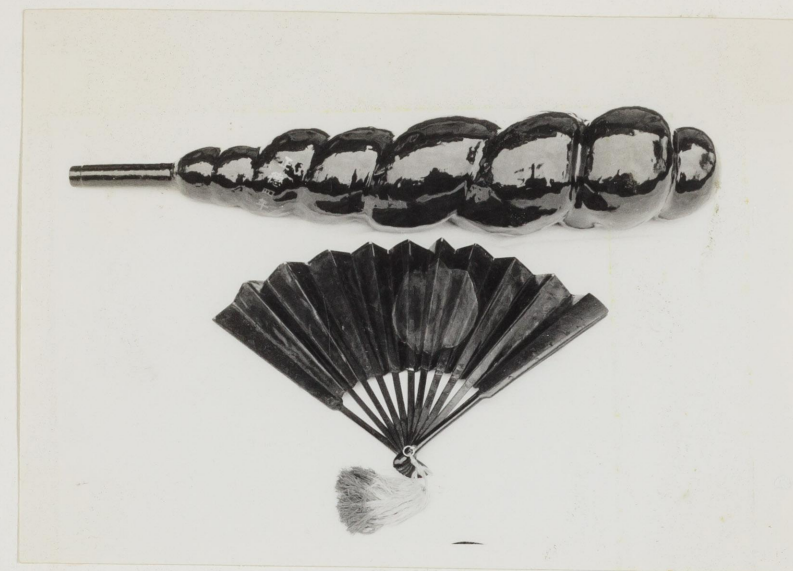
右清書、天明四甲辰年十二月
香嚴院、振興民衆、慈恵、
治國の聖君、志ある、
多く、
多く、
多く、

右清書、天明四甲辰年十二月
香嚴院、振興民衆、慈恵、
治國の聖君、志ある、
多く、
多く、
多く、

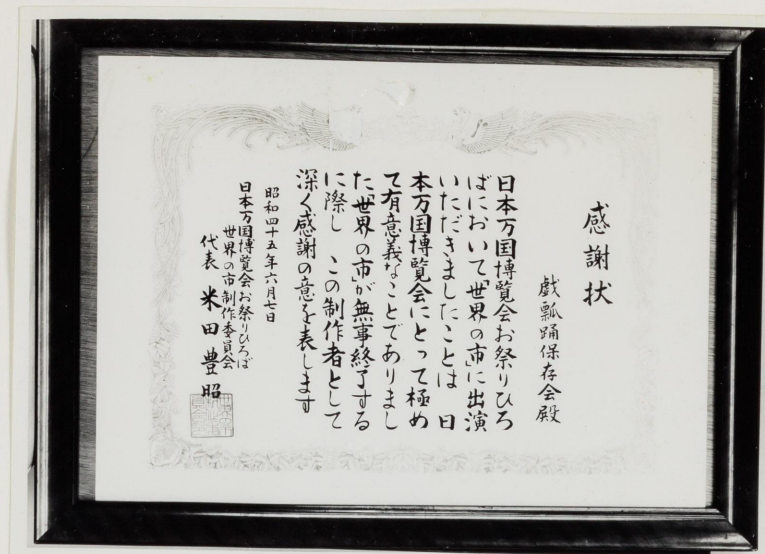
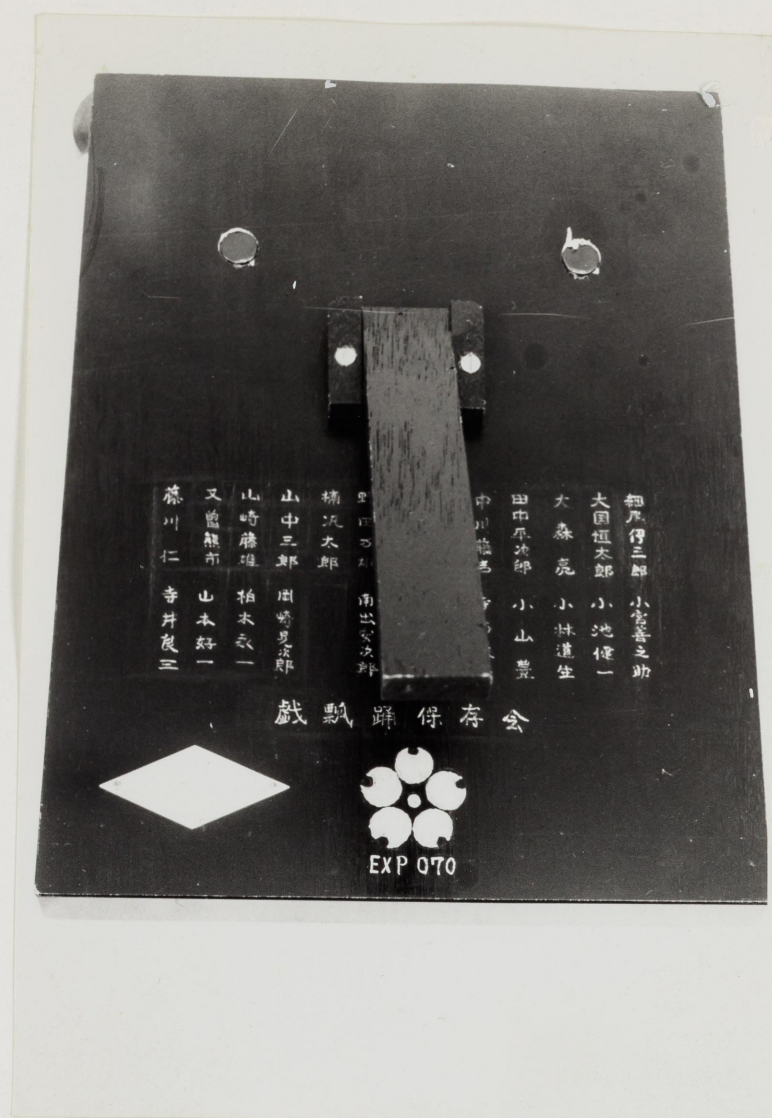














6 7 8 9 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4



6 7 8 9 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4

S. 55. 10. 5







5. 57年か



